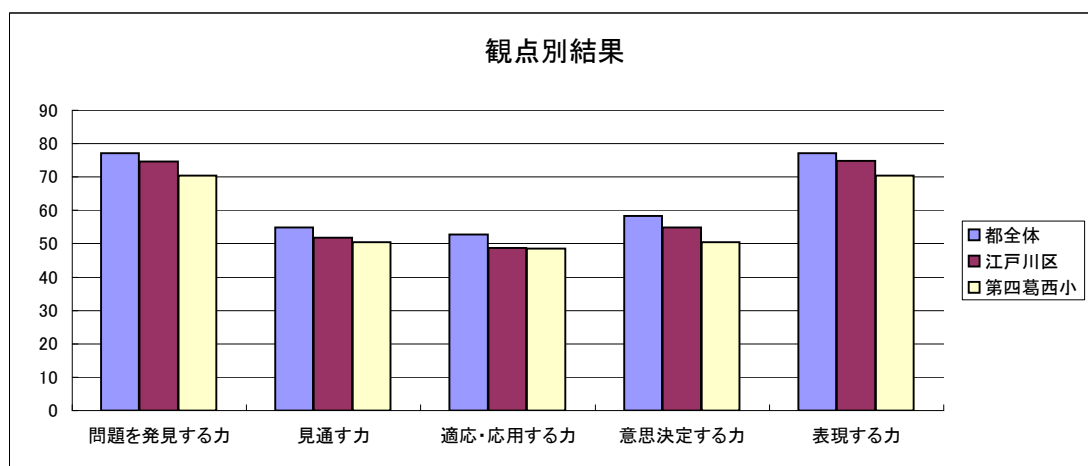


東京都学力向上を図るための調査報告

	観点別結果				
	問題を発見する力	見通す力	適応・応用する力	意思決定する力	表現する力
都全体	77.2	54.9	52.7	58.3	77.2
江戸川区	74.6	51.8	48.7	54.9	74.9
第四葛西小	70.5	50.5	48.6	50.5	70.5



現在の6年生の児童が5年生の時にに行った「児童生徒の学力向上を図るための調査」の結果、問題解決能力の正答率は、都全体の平均値59.8、江戸川区の平均値が56.4のところ、本校はわずかに下回り54.5であった。それらの内、全問正答が3%で、1問間違えを加えると19%である。また、区や都の平均値を超えた児童は50.5%であった。結果を受けて正答率の分布を考えると、学力低下の児童一人一人に対する丁寧な指導を行っていくことが課題になると考える。

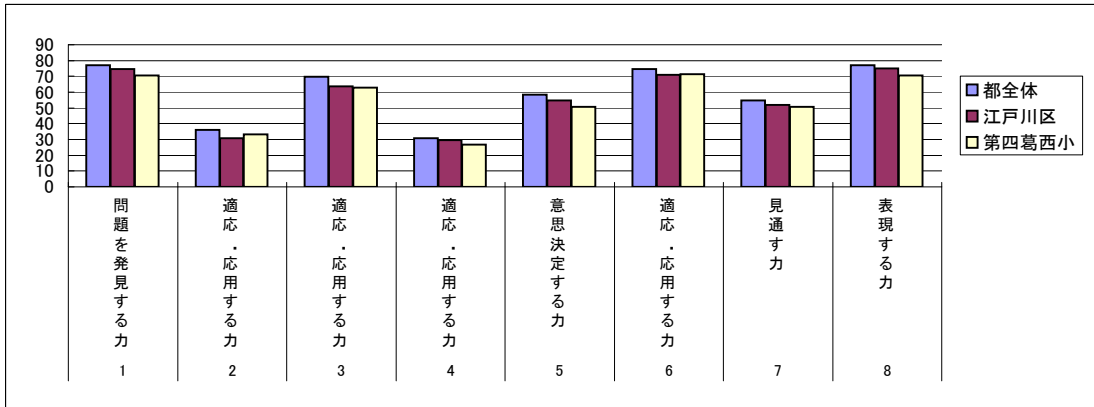
現在求められている学力とは、基礎的・基本的な事項ばかりでなく、もっている知識を日常生活の中でどのように生かしていくかが問われている。そのような中で、今回の「学力向上を図るための調査」が行われた。この調査では、知識量を計るのではなく、日常生活に近い形の設問にどのように考え、どのように対処するかを答える調査である。そこで、観点別に具体的に示すと、「問題を発見する力」「見通す力」「適応・応用する力」「意思決定する力」「表現する力」の5点である。

本校の結果をみると、全体的に区の平均を下回っていることが分かる。特に、「意思決定する力」「表現する力」が不足している。これらを解消するために、各教科、総合的な学習の時間で、問題解決型の学習を多く取り入れ、自らが課題を見つけ、その課題を解決するための方法を考える活動を充実させていく必要がある。具体的に学力向上を図る手立ては以下の通りである。

- ① 児童自らが問題の解決方法を考える活動の充実を図る。
- ② 相手にとって分かりやすく表現する指導の充実を図る。
- ③ 必要な資料を取捨選択して活用する指導の充実を図る。
- ④ 学習した内容を日常生活に当てはめて考える学習の充実を図る。

平成19年度「児童生徒の学力向上を図るための調査報告書」から見た 課題及び指導方法改善のポイント

	1	2	3	4	5	6	7	8
	問題を発見する力	適応・応用する力	適応・応用する力	適応・応用する力	意思決定する力	適応・応用する力	見通す力	表現する力
都全体	77.2	36.1	69.6	30.8	58.3	74.6	54.9	77.2
江戸川区	74.6	30.7	63.7	29.5	54.9	71.1	51.8	74.9
第四葛西小	70.5	33.3	62.9	26.7	50.5	71.4	50.5	70.5



問いごとの結果の分析と指導方法改善のポイント

	結果の分析	指導方法改善のポイント
1 問題 を 発 見 す る 力	70.5%の正答率である。誤答の要因としては、アの「本を売る店の数の違い」とエの「食べ物売店の数の違い」のいずれかについては、読み取ることができたが、両方を読み取ることができなかったことによるものと考えられる。	【各教科や総合的な学習の時間の学習において】 1. <u>児童が複数の情報を比較しながら読み取れる 活動の充実を図る</u> 問題の発見に当たっては、複数の情報を比較して共通点や相違点などを見出す力が重要であり、そのためには、児童に複数の情報を比較しながら読みとる経験を意図的・計画的に積ませることが必要である。したがって、まず、正しく資料を読み取り、次に、問題解決に必要な情報を選択する力が大切になってくる。社会や総合的な学習時間の場でそのような学習活動を多く取り入れ、力の充実を図っていく。 2. <u>設定する問題の意義について吟味・検討する指導の充実を図る</u> 児童一人一人が問題を設定した後にすぐに解決に入るのではなく、グループや学級全体で情報交換を行い、問題の意義や価値について話し合う活動を行うことにより、充実を図る。
2 適 応 ・ 応 用 す る 力	33.3%の正答率である。誤答の要因としては、「東→南→西」という太陽の動きが理解できていないことによるものや、太陽の位置は理解できているが影のつき方を適切に判断することができなかったことによるものと考えられる。	【理科の学習において】 1. <u>実感を伴って理解できる学習の改善・充実を図る</u> 観察・実験などを行う際には、児童が実感的に理解しやすい教材・教具の工夫を図るようにする。例えば、第5学年の「振り子の運動」の学習では、校庭の鉄棒などを利用した糸の長い振り子を使うことで、振り子の動きがダイナミックになり、糸の長さや振り子が1往復する時間の関係を理解できるようにすることが大切である。 2. <u>学習した内容を日常生活に当てはめて考える学習の充実を図る</u> 例えば、第5学年の「てこのつり合い」の学習では、一連の学習が終了した後に「身近な生活の中でのこの利用」など、児童が日常生活の中から想起する場面を設定したり、教師が具体例を児童に示して学習内容と関連させて考える場面を、意図的に設定することが大切である。
3 適 応 ・ 応 用 す る 力	62.9%の正答率である。誤答の要因としては、生活科等において児童が学習経験を多く積んでおり、正しい選択ができたが、お礼の手紙については、書く経験が少なく、正しい内容と順序を選択できなかったことによるものと考えられる。	【国語科の学習において】 1. <u>文章に書く内容が明確になるように指導の改善・充実を図る</u> 手紙を書く経験が少ないので、相手意識をもたせ、丁寧な言葉で分かりやすく文章を書く経験を積ませることが必要である。その際、文章に書く内容を明確に意識させるために、書く目的を明確にした上でメモなどをとりながら内容を確認したり、書いた内容にずれがないかどうかを確かめたりすることが大切である。 2. <u>文章の構成についての理解を深める指導の改善・充実を図る</u> 文章を書く場面において、絵や図などでモデルを示すなどして内容を整理し、文章の構成について理解を深める指導の充実を図る必要がある。さらに、様々な目的に応じて文章を書く場面を設定し、適応力をつけさせることが大切である。

4 適応・応用力	26.7%の正答率である。誤答の要因としては、地図にある縮尺を用いて「600km」の距離にある位置を選択することはできるが、都道府県の位置とその名称や我が国の国土の環境としての日本海の位置についての理解が不十分であることによるものと考えられる。	【社会科の学習において】 1. 我が国の都道府県の構成について理解させるための指導の工夫を図る 都道府県の位置とその名称を確認するときに、日本全体の地図を頭に入れながら、「太平洋側にある都道府県」というように国土の周囲の様子と関係させたり、交通、地形とも関連付ける等、全体的な広がりの中で都道府県の構成をとらえる活動を取り入れることが大切である。また、その都道府県の特徴を学習させることで、国土や風土についての理解を深めることも必要である。 2. 地図上に示された情報を利用して読み取る力をつける指導の充実を図る 特に縮尺を用いて、地図上のある地点からある地点までの長さを測って実際の距離をとらえる技能については、小学校段階では社会科以外の教科で学習する機会がほとんどない。そのため、社会科の地図の学習においてこのような基礎的な技能を習得させ、日常生活場面において、実際に活用できるようにしていくことが大切である。
5 意思決定する力	50.5%の正答率である。誤答の要因としては、地図に掲載されている情報や先生のアドバイスを基にして適切に判断することはできたが、時間の情報を適切に判断することができなかったことによるものと考えられる。	【各教科や総合的な学習の時間の学習において】 1. 必要な資料を取捨選択して活用する指導の充実を図る 第5学年の理科の「天気の変化」の学習では、観察記録や天気図、降水量のデータ、テレビ等の映像などといった様々な情報を教師と児童が協力して収集する。時には、子供新聞などをまとめて購入し、共通の資料をもとに、資料を活用しながら問題解決していく授業を展開する等、資料読み取り、収集、活用する能力を育てるような学習活動を工夫する。 2. 複数の資料から必要な情報を読み取り、検討する指導の充実を図る 社会科や理科、総合的な学習の時間の学習における資料活用の場面において、「資料を見て何に気が付きましたか」というように漠然とした指示を与えるだけではなく、「AとBは何が同じですか」「AとBは何が違いますか」というように児童が読み取る視点を明確にもてるような指示をすると共に、取り出した情報を問題の解決に向けて吟味・検討する指導を行っていくことが大切である。(比較・関連付ける力)
6 適応・応用力	71.4%の正答率である。誤答の要因としては、問題の中から解決するために必要な条件を選択することができなかったことによるものと考えられる。	【算数化の学習において】 1. 問題解決のために必要な情報を整理して、問題を解決する指導の改善・充実を図る この問題では、解決するために必要な数値以外の情報が提示されている。したがって、この問題を解決するためには、問題で何が問われているのかについて明確に読み取り、必要な情報を選び取ることが必要となる。そのために、日頃から問題文を整理して何が必要な情報を考えたり、条件過多や条件不足の問題を提示し、問題解決のために必要な条件を児童自らが考え、獲得していく力を伸ばしていくことが大切である。 2. 比例の素地を養う指導の改善・充実を図る 比例の素地は、一般的に第2学年の乗法の学習から培われるものである。被乗数が2倍になれば、積も2倍になる。九九の学習の際にそのような数量関係を意識させたり、ともなうて変わる2量の問題では、表を作成・活用させたりすることによって、比例の素地を養う指導を充実させることが重要である。
7 見通す力	50.5%の正答率である。誤答の要因としては、話し合いの内容を読み取ってカレンダーに当てはめていきながら、さらにどのような情報が必要かを十分に考えないで、話し合うことから安易に選択してしまったことによるものと考えられる。	【各教科や総合的な学習の時間の学習において】 1. 児童自らが問題の解決方法を考える活動の充実を図る 教師が、問題を提示した後に、自力解決の時間を十分に設定する。その際に、既にもっている知識や経験をうまく活用できるように支援することが大切である。時には、問題解決に必要な新しい知識や情報を使えることも必要である。 2. 根拠をもって結果の予想を考えるように指導の改善を図る 問題を解決した後の、結果についての「見通す力」を育成するためには、話し合い活動の中で、根拠に基づいた考えを発言できるように指導する。例えば、「前に〇〇が～になったのを見たことがあります。だから結果は、～になると思います。」などの話型を提示することも大切である。
8 表現する力	70.5%の正答率である。誤答には大きく分けて2種類の傾向が見られる。一つは、問題からの事実の読み取りに課題があるものである。もう一つは、お客さんに対する表現として課題があるものである。	【各教科や総合的な学習の時間の学習において】 1. 情報から事実を読み取り、適切に表現する指導の改善・充実を図る 社会科の学習において、グラフや図などの資料を用いて調べたことを新聞やレポートにまとめるには、資料から分かる事実を客観的に読み取り、調べて分かった事実と自分の思いや考え・意見等を整理して書けるようにする指導が大切である。 2. 相手にとって分かりやすく表現する指導の改善・充実を図る 国語に「話す・聞く」の学習では、具体的な相手や目的を設定して、その状況に合わせて話したり聞いたりする学習活動を取り入れるとともに、児童の相互評価や自己評価の場面などを取り入れて、使っていた言葉が分かりやすかったか、相手や目的にあっていかなどの視点から、児童が表現できるようにすることが大切である。

	観点別結果				
	問題を発見する力	見通す力	適応・応用する力	意思決定する力	表現する力
都全体	77.2	54.9	52.7	58.3	77.2
江戸川区	74.6	51.8	48.7	54.9	74.9
第四葛西小	70.5	50.5	48.6	50.5	70.5

